



鎌倉

北条九代記  
十

3496  
10



3496  
10

鎌倉北條九代記卷第十

天變祈禱付彗星兩士等勘文

文永三年正月十二日天變ノ御祈リトテ宮寺ニ仰セ  
テ秘法ヲ行ハル。去年十一月十四日ノ曉彗星東ノ  
方ニユ掃部助範元ヲ初メトシテ晴茂國繼御所ニ泰  
リ御偵三輕カラスト申ケル所ニ陰陽師晴平晴成  
テ二彗星ノ勘文ヲ進スコレニヨツテ同十六日將軍家  
ハ庇御所ニ出御アリテ司天曆學ノ輩ヲ召テ變異ノ  
事ヲ相尋ラル土御門大納言左近大夫將監公時伊  
勢入道行願信濃判官入道行一以下ノ人々オホク  
泰シテ簀子ニ候セラレケル所ニ司天ノモカラ様々  
申ス旨アリケルナヲイヨク伺カニ見テ子細ヲ言



此條止也

上スヘキヨレ太宰権少貳入道心蓮ヲモツテ仰せ下サ  
 ル同十八日卯ノ刻ハカリニ彗星出現レテソノ長二尺  
 餘ナリ芒氣色白ク室宿ヲ犯レテ西方ニ至ユ年ヲコ  
 エテ消退セザリケレバイカサマ世ノ變災ナルベシトテ  
 御祈禱スレタサレケリ若宮ノ別當大僧正隆辨ハ金  
 剛童子ノ法ヲ修セラレ安祥寺ノ僧正ハ如法尊勝王  
 ノ法ヲオコナハル陰陽師業昌ハ天地災變ノ祭ヲ修シ  
 同キ國繼ハ屬星ノ祭ヲオコナヘリ伊達藏入大夫池伊  
 賀前司御使トシテオノク肝膽ヲクダキテ修法ナリ  
 又ハル翌日陰陽少允晴家ヲ御所ノ西ノ壺ニ召テ如  
 法泰山府君ノ祭ヲ奉仕セシメ將軍家御壺ニ出御  
 アリ鞍置馬一疋銀劔一腰手筥二合二緋ノ絹ヲ納テ

出サレケリ誠ニ重キ御慎ニミトテ將軍家殊ニ恐レ  
 忌々マフ然レバ舊記ノ載ルトユロ彗星ノ出ル事自  
 二六光ナレ日ノ暉ヲ假テアラハレユ此故ニ夕ニ東ニ  
 指レ朝ニ西ニサス芒ノ及フ所ニカナラス災變アリ  
 ソノ色青キハ王侯ヤフレ天子スナハチ兵ニクルヒム赤  
 キハ賊兵オコリ黄ナルハ女色ヨリ權ヲ害アリ后ハ  
 ソノ位ヲ奪ハル黒キハ水邊ノ賊兵江河ヲ塞キテ所々  
 ニオコル今コレ白色ナルモノハ將軍逆責ノ端ナリト申  
 沙汰シケレバ又カタハラニ心アルトモカラハ古ニヘヨリユ  
 ノカタ異域本朝ノ記文ヲ見ルニ彗孛ノアラハル時ニ  
 災變アルコトモアリ又何事モナキ時モアリ但レ事ナ  
 キハスクナレ或ハ災ナキ時ニ出現ニタルハ記録ニノセ

七条ノ下ニ

サルコトモアリ。又ハ他方ノ災變ニシテ。本朝ノコトニ預  
ラサル例モアリ。ソレ國家ノ興亡ハ。カナラス。善亭ノアラ  
ハル、ニハ五ルベカラス。或ハ國主ニタリニ逆威ヲアルヒテ。國  
郡ヲ制治シ。理非邪正ヲイハス。我ニ阿順スル者ニ親シ。三  
意ニカサハサレハ賢君子ノ人トイヘトモ。疎シテ近クケ  
ス。小罪ヲオモク罰シ。忠ナキニ賞禄ヲアタヘ。侈高ク  
怒月多ク。賞罰正シカラス。法令定マラス。朝ニツバ  
コト。夕ニハアラタマリ。國家ノアヒタ賢者智慮ノ人。諸藝  
堪能ノトモカラ。自然ニ断絶シ。佞好ノモノオホク集マ  
リテ。主君ノ眉睫ヲ搦シ。奉行頭人邪曲ニシテ。家ノ  
ニ黨ヲナス。臣下タカヒニ威ヲアソフテ。不和ナルニ  
至テハ。善亭ノ災ナク。トモオモキ。國家ノ慎ミナリ。

孤

今ノ世ノ中ハ。子ニ付テモ危シク。トテ。彈指スル  
モアリケルトカヤ。コレヲコソ珍事ト思フト。ユロト。同ニ  
月朔日ノアレタ。日ハ出ナカラ。空曇リテ。四方黒暗ニ  
ナリ。物ノ色。アヒ髣髴ナラス。巳ノ刻ハカリヨリ。雨降イ  
テ。小止ナシ。晚景ニオヨビテ。泥ノ雨ニキリニ。来  
リ。草木ノ葉ニ湛リテハ。枝葉ミナ垂臥タリ。希代  
恠異カナト。諸人色ヲウレナヒケリ。ソレ太平ノ世ニハ  
五日ノ風條ヲ鳴サス。十日ノ雨塊ヲヤフラス。草木潤  
ヒ。五穀ユタカナリトコソイフ。ニ是ハソモ何事ノ先兆ナ  
ルラント。アヤレシニ申合ケルニ。主殿助業昌舊記ニヨツテ  
勘文ヲ進ス。抑古ニハ。垂仁天皇即位十五年丙午。三皇  
ノ降コト。雨ノ脚ノゴトク。聖武天皇天平十二年辛巳。

七条ノ...

三

六月戊寅ニ洛中ニ米飯ヲフラスコト一日一夜諸人コ  
レヲ食スルニ尋常ノ味ニ替ラス尤モ飢ヲ資タリ翌  
年十一月ニ陸奥國ニ紅ノ雪フル光仁天皇寶龜七年  
九月二十日ニ石瓦ノ降ルコト雨ノゴトニ同八年旱魃  
小水タレク井水ミナタエテ渴死スルコト夥シコトハ  
變異ハ上古一時ノ災ナリ然ルニイマ泥雨フルコトハ  
極メテ先例ヲ考フルニ何ノ事トモ知カタレタゞ深ク  
御慎ニアルベシトオトロキ申ケレハ聞人ミナ手ノ内  
ニ汗ヲ握リイカナルコトカ出來ニト後ヲオソレザル  
カカリケリ  
甲乙人等甲地停止

同四月二十一日鎌倉内外ノ甲乙人等數十人比企

谷ノ山ノ麓ニ群集シ未ノ刻ヨリレテ向ヒ飛礫ヲウチ  
ケルホドニ所々ノ溢者トモ兩方ニ行集ヒ意恨モナ  
ク怨モナクテ兩陣ヲ分チ初二夕々飛礫ヲ打合ヒ漸  
々人衆ノカサナルニ任セテ夕カヒニ矢ヲ放チコレニ中  
リテ死傷スルモノ兩陣ニアマ夕出來ケレバイヨク引  
カス親屬朋友ソノ敵ヲ討ニトカハ暮方ニナリテ  
武具ヲ帶シ馬ニ乗テ七十ニ軍陣ニ立トナラス関ノ  
声矢呼ノ音入乱レテ戦カフ手負死人オホカリケレ  
ハ夜廻ノ十モカラ數百人ヲ率レテハせ向ヒゴハソモ何  
事ゾ意恨ニモアラス怨ニモアラス見エタルコトモナク  
シテ兩陣ヲ張り手柄ニモアラヌ武備ヲハケミ人ヲ  
殞レテ騷動セシムル條乱ヲマナク曲者ニアラスヤ

北條九代也 卷上 四

京都ニシテ童部トモノ小石ヲナケテ印地スルダニ宜  
 レカラス。鎌倉ツタリニハ古今イマダ此事ナレヌコブル  
 狼藉ノ至リナリトテ。張本三人ヲ召捕テ禁籠セラル  
 今ヨリ以後。関東ノコトハ申スニ及ハス。京都ニシテモ  
 堅ク禁遏スベキ由ヲ六波羅ニ仰せ遣ハサル。

將軍家御反逆付松殿僧正逐電

同二十二日。將軍家御病惱オハレマス。松殿僧正良基御  
 驗者トシテ。護身ノタメニ近侍アルベシトテ。日夜御傍リ  
 立サラス。振鈴ノ音オリ。外様ニヒキ聞エテ。殿  
 中イト、静マリカヘリテ。五月廿六日ニイタリテ。御  
 氣色イヨクヨロシカラス。引コモラセ給フ。コレニヨツテ  
 諸大名ニモ御對面ノコト打取エケレバ。人々心ノ外ニ

思ヒ奉リ。典藥ノ十モカラニ尋子奉レトモ。マタ御療治  
 ノタメトテ。乘リタル者モナレ。同五日ノ晚景ニ木工頭  
 親家京都ヨリ鎌倉ニ下向アリ。御所ニイリテ。潛ニ  
 申ス旨。ステニ夜陰ヨリ曉ニ及ビテ退出ス。何事トハ  
 ラス。一兩日逗留シテ。親家ハ上洛イタサレケリ。是ハ  
 仙洞ヨリ内々御諷諫ノタメニ下向セシメラレタリト  
 汰アリシカハ。諸人マス。アヤレニ存セストイフコト  
 ナレ。又オリフレニツケテハ。和歌ノ御會ニ事ヲヨセラレ  
 近習ノ者トモヲ召アツメ。密々ニ秘計ヲクハタテ。北  
 條時宗ヲ討テ。將軍家思召スマ。ニ天下ヲ領ジ。今ハ  
 ニトノ謀ヲメクラレタマフ。ト世ニ專ハラ沙汰アリ。カレヨレ  
 タカセニ語りケルホ。十二風聞カクレナク。時宗ニ告知ス

ルモノ多カリケレバ。北條家コレヨリ物ゴトニ遠慮アリ。疑  
 殆オユリテ。用心ニ際ナク。物ノ色ヲ立ラレレカバ。オツ  
 カラ御所ノアリサマ。人ノ出入モ故アルヤクニ目ヲ側メ  
 テゾミエニケル。同キ十九日。左京大夫北條時宗。越後守  
 賢時。秋田城介。恭盛。ヒツカニ相摸守。政村ノ家ニ會合シ  
 テ。夜更ルニテ。額ヲ合セテ。密談アリ。此人ノ外ニハ  
 キク人モナク。知コトモナレ。何事トハシラスナカラ。將軍  
 宗尊親王ノ御事ナレベシト。沙汰アリケレハ。ソノ日。松殿  
 僧正良基ハ。御所ヲ出テ。行方ナク。逐電セラル。コレタ  
 り。ゴトニアラス。イカサマ子細アル故ナルベシ。世ノ風聞モ定  
 メテ。跡ナキコトニハアルベカラスト。鎌倉中ニハ沙汰ヲイ  
 せり。後ニ聞エシハ。良基ハ。惡逆ノ企ヲ申シス。メレ張本

トシテ。ゴトト漸願ハレケレバ。身ヲ遁レシタメニ。御所ヲ  
 落シテ。首ニ高野山ニカクレシカドモ。打頼マル。人モナシ  
 ツ。井ニ断食シテ。死セリトカヤ。ソレ釈門ノ徒ハ。末世ト  
 イトモ。ゴトトクコレ。佛弟子ナリ。大聖ノ遺誠ヲモリ  
 人ヲ教導シ。現世福壽ノ祈禱。護摩灌頂ノ法ヲモツテ。  
 実義性空ノ妙理ニ引入シ。諸ノ衆生ヲアルレシ。苦ニカハ  
 テ。濟度スベキヲコソ。真ノ沙門ノ行跡トモイフベキニ  
 无用ノ名利ニ我執ヲ先トシ。非道ヲモツテ。世ヲ乱サシ  
 トス。佛ノ降魔ノ方便ニモアラス。菩薩慈悲ノ殺生ニモ  
 アラス。外相ニハ三衣ヲ著シテ。佛弟子ニ似タリ。内心ニ  
 ハ。重欲我慢ヲコトハシテ。提婆。瞿伽梨カ行跡ノ如シ。  
 學佛法ノ外道トハ。コレヲソ名ツクベキ。將軍家ニタ

北條家ノ事

愚カニミレテ。カ、ル大事ヲ思召立ニハ智慮深思ノ  
 人ヲ近ツケテ。異見ヲ問給フベシ衆愚ノ謬々ハ一賢ノ  
 唯々ニ如ストイヘリ。ソノ聖命ニモアラサル人ニ談合密語  
 レタレハ。夕ヤスク外ニ泄ケルコト暗主ノ態コソ悲シケ  
 レ良基僧正ハ智慮ナク思ヒ詰ハテ。舌ニ任セテ大  
 事ヲ閑談シ風ニ揚ル輕毛ノエトク。ソツカニ事ノ端アラ  
 ハレトスルニ臨ミテ人ヨリ先ニ逐電シ跡ハ亡ヒニオヨブ  
 ガゴトク。七十ニ逆心ノ新人トナリケルアサニキ所行  
 ニアラスヤト心アル輩ハ惡ニ思ハヌハナカリケリ。  
 鎌倉騷動付北條教時別心并將軍家御帰洛  
 中勢太輔北條教時ハ名越遠江守朝時ノ六男ナリ。北  
 條家繁榮シテ一家一門トタニイハ所領俸禄ニ預リ。

榮耀ニ誇リ。貴顯ニイタリ。他門ノトモカシハオノツカ  
 ラ譜代相傳ノ忠義ヲ運ビ拜趨ノ礼ヲ正シクス。將軍  
 家ニレヨ目懸シクオホシメシイカニモシテ北條家ヲ女  
 タシケ。御心ノ爲ニ世ヲ治メバヤト企テ給ヒ内々諸人  
 ノ心ヲ挽ルタフトコロニ教時イカナル故ニヤアリケシ  
 將軍家ニ心ヲ寄せ奉リ。御前近ク親ミテイラセ密々  
 談話ヲイタシケルコトステニ端頭ハレシカハ。鎌  
 倉中騷動ニ何トハラス大事出來タリト云沙汰シテ  
 而國ノ内々ハ蜂ノゴトクニ起リ。六月二十四日ノ早  
 天ヨリ鎌倉ニ競ヒアツマリ。寺社民屋ニ込入ナリソノ  
 外ハ居餘リテ小路ニ馬ヲタテ。近くニ塞カリミナタリ  
 七月朔日ニイタリテハ諸方ノ御家人等兵具ヲ帶シ



旌ヲ靡カシ。関ヲ破リテ馳來リ。又ハ關道ヲ廻リテ。大  
正ノ夜。ルノサカヒモナク。引モ子ギラス。三太鐘  
合ニツキリテ。雲霞ノゴトニ。何事ト聞定メタルニハア  
ラニ。鎌倉ノ民俗騷キ立テ。資財ヲトリカクシ。雜具ヲ  
モテ。コヒ男女サマヨヒテ。老タル親稚ナキ子ノ手ヲ引  
抱キ。拘ヘテ。山深クコモルモアリ。舟ヲリテ。他國へ渡  
ルモアリ。武士ハ甲冑ヲ帶ヒテ。東西ニハセテ。カヒ相摸  
守ノ門外ニアツマリ。又ハ政所ノ南ノ大路ニ馬ヲ丑セテ  
關ノ音ヲアゲタリ。イツクニ敵アリトモヒラス。誰人ノ  
心トモ聞分タル者ハナシ。相摸守ハ少入道蓮心信濃  
判官入道行一ヲ使者トシテ。將軍家へ兩三庭ノ往反アリ  
リ。カハル騷動ノ候ランオリクニハソノ以前ノ將軍家イツ

少  
989

關

擁

シモ先ヅ執權ノ亭へ入御シタマヒテ。世ノ中ノ變ゾウカバ  
ハ仕候ヒテ候。若或ヒハ然ルベキ人ノ營中ニ泰候シテ  
守護シ奉リシタメシモ候。子ノ世ニテハソノ儀ナク  
ウチノ蠶マリテ。オハシテ候。御事ハ憚リナガラ。世ノ人  
モツテ。在ニ奉リ候。イツギ。コナタへ入御シテ。世ノ  
アリサマヲモ御覽ゼラルベキ状ト申ツカハサレシカハ。年  
月日比御所ニ有テ。朝ニ馴眠ヒタニ親。三詣タヒケ  
ル者トモ。色ヲ失サヒ慄ヒアテ。我モくト御所ヲ  
逃出タリ。周防判官忠景信濃二郎左衛門尉行章。伊  
東刑部左衛門尉祐頼。鎌田次郎左衛門尉行俊。澁谷  
左衛門次郎清重等ハカリコソ。御所中ニハ居残りタシ  
歳寒クシテ。而後ニ松栢ノ貞ハ知ルトイヘリ。日比ハ

懐

北條九代記

八十三

如

諸多ヒ身ニ代リ命ニ替ラント申ケルモ一  
 落シテ跡ヲカタニ行方ナク散失スルモ嗚呼  
 同日日午ノ刻ハカリニスハヤ事オユリ軍初  
 立又ルツヤト割リテ鎌倉中ノ騷動斜ニテ  
 權太輔北條教時朝臣ハ將軍家ニ心ヲヨセ奉  
 ノ武士數十騎ヲ率ニテ藥師堂谷ノ亭ヨリ懸  
 塔ノ辻ノ宿所ニイタリ関ノ声ヲ揚シカハソ  
 騷キ立テアリトアラユル軍兵トモ鎧腹卷太  
 トヒヒメキ馬ニヤチソリ旗サレアケ東西南  
 レトモ誰人ヲ大將トシテ何方ヘ押掛ルトモ  
 ル事モナレ迷惑フ女童ノ啼叫フ声老タル親  
 引テ馬ニ蹴ラレビト落行者マダソノアヒタ

物ヲ奪ヒ取テ走リユク打フセ切倒レ物ノ色目  
 ヲワカス相摸守時宗コノ由ヲ聞テ東郷八郎入  
 カハレテ教時ヘ仰せ越レケルヤウ當家ノコト  
 遠州時政ヨリ草創シテ神ニ通シ天ニ契ヒテ  
 執權數代ニ傳ハレリ泰時時頼相續シテ正道ノ  
 ヲイタス躋レルヲイハシメテ直キニ歸レ德澤  
 ホトコレテ仁義ヲ万姓ニスハメ國家長久ノ  
 クレテ上下安泰ノ道ヲ專ハラトスコレニヨ  
 テニコノ餘風ニアツカリ俸禄ソノ身ニ相應  
 レタカヒテ榮耀ニホコレリ佗門佗家ノトモ  
 ケ侍ヘラン然ルヲ將軍家サレニ國家ノ政道  
 ラレス和歌ノ道ハ本朝ノ風儀ナレハモツトモ

七條九代也

八卷一

乙

フニ足ヌヘレタ。ソノ隙ニハ蹴鞠博碁ヲ事トシ酒宴ニ長  
シ女色ニ陥入タマヒ諸人ノ憂ヲオホレメシ知ズ威勢輕  
忽ニシテ武德磷キ令命改變ニレテ法式猥リカハレ是  
ヲ歎侍下イラセテ。レハノ諫言ヲ奉レハカハツテ嘲哂賤  
挫レタマヒマスノ怒ナルコト天下ノ乱根ニアラスヤ  
ナヲアハツサヘ佞奸ノ不覺人ヲアツメ北條ノ家門ヲ滅シ  
時宗カ一族ヲ亡ホサントノ御計ラヒコレ何ノ事ソヤソレ  
ニ貴殿心ヲ丑セラレ非道ノ結構スコナル人外ノ所行ト  
申スヘレ獅子身中ノ虫トハカハルコトノ喻ナラシカ年來時  
宗ニ遺恨ノコトモ候タハ追テイカニモ承ハリレカルベキ  
義ニフヒテハ兎モ角モ分別アルベレコトタビヲ幸トシ給  
ハハ比與ノクタテ誰カ心アル人一味スヘキハヤク御心ナ

早法

シヲアラタメテコナタヘ來リ給ヘト申ツカハサレシカハ中  
勢太輔教時大ニ耻カレクヤカテ東卿入道ニ打ツレテ  
相州ノ亭ニイリ全ク野心ヲ存スルニアラスモレ此一  
門ニ敵對スヘキ人モアルカト引ミシタメニ此ハフルマヒ候  
ナリ枉テ御免ヲ蒙リ候タハントシ一紙ノ誓狀ヲ下イ  
ラセラル時宗ハコレニハ及ヒ候マレキモノヲトテ何ノ  
心ヲ殘サレタル色モナレサルホトニ將軍宗尊親王ハ同  
日ノ戌ノ刻ニ女房ノ輿ニメサレ御所ヲ出テ越後入道  
勝圓カ佐介ノ亭ニ入御レタマフ北ノ門ヨリ赤橋ヲ西  
ニオモムキ武藏大路ヲ經テ京都ニ還リ上ラセタマフ  
相模七郎宗頼同六郎政頼遠江前司時直越前前司  
時廣彈正少弼業時駿河式部大夫通時以下ノ武士

枉テ

565

都合十九人。雜兵下部四百餘人供奉。レタテマツリ。同  
七月二十日ニ。京都ニ著御アリ。左近大夫將監時茂  
朝臣ノ六波羅ノ亭ニイリタマフ事柄。隱便ノアリサテ  
御痛ハレキマテニゾ見奉リケル。

宗尊親王御出家付薨去

將軍宗尊親王ハ京都ニ還御アリケレトモ。關東幕府ノ  
職ヲ止ラレ。非道邪曲ノ御行跡重疊。レタマフエナレバ  
後嵯峨上皇モ。ホシクハ御對面ノ儀モ。オハレマサス上  
皇ヨリノ勅使トシテ。中御門左少辨經任ヲ關東ヘツカ  
ハサレ。親王御上洛ノ御事ヲ謝シケレマフニ。武家別義是  
ナキニヨツテ。世ノ中无事ニ治マリテ。諸人安堵ノオモヒ  
ヲ。作タレケリ。同年十月ニ。宗尊親王ハ六波羅ヲ出テ。承

明門院ノ舊跡。士御門万里小路ノ家ニ住給フ。幽ナル  
御アリサテ。往初ニモアラス。オホレタケルガ。同キ九年  
六月ニ御飭リヲオロシタマフ。法名ヲハ覺惠トゾ申  
奉ル。同十一年七月御年二十三歳ニシテ薨去。シタマ  
ヒケルトゾ聞エシ。去ヌル建長四年ヨリ。文永三年ニイ  
タルマテ。將軍ノ職十五年。一朝ニシテ花チリテ。威勢空  
レク地ニオチケルコソ痛ハレケレ。

惟康親王御家督付蒙古本元來歴

惟康親王ハ前將軍宗尊親王ノ御息御母ハ近衛攝  
政太政大臣藤原兼經公ノ御娘。宰子トゾ申ケル。文  
永元年。鎌倉ニ御誕生アリ。去ヌル文永三年六月二十  
三日。鎌倉騒動ノ時。宗尊親王ハステニ京都ニ歸リ上

ラセ給ヒ若君ハ相摸守政村ノ亭ニ入冬ニレカハ時宗  
 政村カ計多ヒトレテワツカニ三歳ニナラセタマフ若君  
 ヲ討リタテマシラセ関東ノ柱礎鎌倉ノ君主トシ諸  
 將諸侍更ニ前代ニ相替ラス拜礼崇敬シテ仰ギ奉ル  
 同年七月二十四日京都ヨリ勅書ヲ下サレ征夷大將  
 軍ニ任シ從四位上ニ叙セラレレカハ鎌倉ノ躰安泰静謐  
 ニナリテ上齊ヲリ下治マリ田島登本リ市店賑ハヒ  
 万民徳風ニ歸シ四海逆浪ノ音ナレコノ比異朝ニ北  
 狄ノ蒙古オヨリ中華ヲ隨カヘテ大元國ト号ス抑蒙  
 古ノ祖先ヲ尋ヌル一人ノ寡婦アリテ閑窓ノ内ニ起卧  
 ケル所ニ夜コトニ光明アリテソノ腹ヲ照スツ井ニ感シテ  
 孕ミツク月盈テ一乳ニニ子ヲ生ス中ニモ季子子寧端義

可汗

陝 567

見聰惠利根ナリ子孫ステニ蕃滋シテ一部トナリ遼金  
 ノ世ニイタリ漸々部属昌ヘテ鞬韉ニシタカヘリ也速該  
 カ時ニオヨロテ塔々児部ノ長ニ鉄木真トイフモノアリ  
 也速該死シテ世ヲ取り西夏ヲ攻トリ諸部ヲ隨カヘ自  
 カラ成吉思可汗ト名ヲアラタメ雲中九原ノ地ヲ犯シ  
 奪フ金ノ熙宗皇帝ノ時九十餘郡ヲ攻伐ス兩河山東  
 數千里ノ人民殺サルモノ幾千万トモ數ヒラス鉄木  
 真ステニ大軍ヲモツテ燕京ヲ亡ホレ高麗ヲ降セシメ  
 テ六十六歳ニレテ病死セリスナハチ廟ヲタテ太祖  
 皇帝ト号ス第二ノ子窩闊台ソノ嗣トシテ太宗皇帝  
 ト称ス陝西封丘汴城ヲ打レタカヘツ井ニ金國ヲ攻滅  
 奉レ宋國次テ滅スソノアヒタ太宗定宗ステニ殂シ

北朝九代記 卷十

憲宗位ニ即ソノ弟忽必烈相次テ世ヲオサメコレヲ世  
 宗皇帝ト稱ス。コノ時至元々々年ニ都ヲ燕京ニ立テ國  
 号ヲ大元トイフ。コレ乃大易大哉乾元ノ義ニヨリテ名  
 ツケタル所ナリ。大元一統ノ世トナリテ高麗國ノ王子僂  
 ステニ蒙古大元ニ隨カフコレヲ案内トシテ。コノ日本へ書  
 簡ヲ贈リ。蒙古大元ニシタカヒ貢物ヲ奉ルベキ由ヲ企テ  
 シカトモ高麗王申ケルハ日本ハ海路杳カニ隔テ。急速ニ  
 ハ通ジ難トアリケレハソノ事止ニケリ。

蒙古牒書送日本

文永五年十二月京都富小路新院ノ御所ニシテ。一院五  
 十ノ御賀アリ。伶人舞樂ヲ奏シ終日ノ經營善盡シ美  
 ヲ及セリ。ヤカテ御飾リヲオトシ。法皇ノ宣旨ヲ蒙

フラセタマフ。此比六合風オサマリ。四海浪シシカニシテ。万民  
 淳化ノ惠ニ歸シテ。京都邊鄙コトクノ太平ノ声。洋々  
 タリ。一院新院今ハ叡慮モオタヤカニテ。姑射仙洞ノ緑  
 蘿ヲワケテ。洛中洛外ノ御幸鳳車ノ碾ル音。テモオサ  
 マル御世ノタメシトテ。イト徐カニゾ聞エケル。カハル所ニ  
 蒙古大元ノ狀書ヲ日本ニオタリ。筑紫ノ宰府ニ著岸  
 ス。スナハチ關東ニオタリツカサレシニ。武家ヨリ禁裡ニ  
 奉ラル當今勅ヲ下シ。菅原宰相長成ニ返簡ヲ書シメ  
 世尊寺經朝卿コレヲ清書ス。然レドモ武家内談ノ評定  
 アリ。蒙古ノ書面スコソル无礼ナリトテ。返狀ニオヒハレズ  
 昔隋ノ大業二年ニ日本朝貢ノ使者國書ヲ撃ケテ來  
 レリ。ソノ文章ニ日出處天子无恙耶。日没處天子致書ト

アリ。天皇御覽給ヒテ。天ニ二ノ日ナク。國ニ二ノ王ナシ。  
日没處ノ天子トハ何者ゾヤトテ。大ニ无礼ヲナカメ。返  
ヒケリ。今蒙古ノ狀書ニモ。マタコレ无礼ノ文章アリ。返  
狀ニ及ハサル。誠ニコトナリトゾ聞エケル。

將軍惟康賜源姓。付太元遣使於日本。并

北條時輔逆心露顯

同七年十一月。將軍惟康從二位ニ叙シ。左中將ニ任ジ。  
源姓ヲ賜フ位署ステニ。鎌倉ニ到著ス。將軍家御拜賀  
ノ御名々ニ。鶴カ岡ノ八幡宮ニ參詣アリ。路次ノ行列ハ  
先蹤ニ。マカセラレ供奉ノトモカラ。飾ヲ三カキ。花ヲカサ  
リ。奇麗ノ出立傍リヲ輝カシ。見物ノ貴賤巷ニ盈タ  
リ。近年太平ノ驗ニナリト。諸人喜ブコト限リナシ。異

故ナク下向アリテ。ソノ夜ハ殿中ニ舞踊酒宴ステニ。曙  
ニオヨベリ。大名諸侍上下トモニ。榮樂万歳ヲウタヒ。数  
献酬與ヲツタサレケリ。此年蒙古ノ使者趙良弼ヲ本朝  
筑前國今津ニ着岸シ。牒狀ヲ呈ス。兎ニモ角ニモ日本  
ヲ伐取ベシトノ秘計ナルベシト。公家武家トモニ憤リ。才  
ホシメシケレバ。中ノく返答ニモ及ハス。博多弥四郎トイ  
フモノヲ。サシテヘテ歸シ。ツカハサレシカバ。蒙古ノ王ステ  
ニ弥四郎ニ對面シ。通事ヲモツテ。サシテ。問答シ。種々ニ  
饗食シ。ツ、寶物ヲアタヘテ。日本ニオクリカヘス。北條重時ニ  
ハ。孫武藏守長時ノ二男。治部太輔義宗。鎌倉ヨリ上洛  
シ。六波羅ノ北方ニ居テ。式部太輔時輔ト。兩六波羅トナ  
リ。西國ノ事ヲ。ナリオコナヒケリ。京都鎌倉ノアヒタハ。櫛

ノ子ヲヒクカゴトク飛脚毎日ニ往來シ九國ニ嶋ノ事  
 ニシヒテ織芥ハカリモガクシナシ諸國オソツカラコレニ  
 伏シテ天下ノ政理好悪ノ沙汰サテニ口外ニ出ス者ナ  
 シ狼藉亡命ノヤカラ山野ノアヒダニモ身ヲカケスニ  
 ヲリナク一夜ノ宿モカス人ナケレバオソツカラ亡亡  
 テ在々所々万户樞ヲトチス千門ニモケテ女童商人  
 マテモ手ヲサスモノモアラザレバ淳朴厚篤ノ世ノ中也  
 ト上下心易クソオモヒケル然ル所ニ同九年正月ニ惟康  
 從二位ニ叙セラレ中將ハモトノゴトニ同二月十五日鎌倉  
 ヨリ早馬ヲ立テ六波羅ノ北ノ方北條義宗ノモトヘケ  
 來ルコトアリ義宗ニカニ軍兵ヲモヨホシ六波羅南方  
 式部大夫時輔カ館ニオシヨセテ時輔ヲ初メテ家中ノ

上下一人モノコラス討木ホス思ヒモヨラサル俄事ニ侍  
 中間原周章彷彿物ノ具取テ差向フニテモナク逃落シ  
 トノミスルホトニ草葉ヲ薙カゴトクニナ打伏せ切倒シ  
 死骸ハゴカレコニ臥乱レ紅血ハ縱横ニ川ヲ流せリア  
 タリ近キ民屋ノ男女コハソモ何事ゾトテ騒ギ立テ逃  
 下トヒシカドモ手間モイラスウチ静マリ義宗ニツカニ馬  
 ヲ入ラレケレバ今ハ左モアレコノ後マタイカナル事カア  
 ルベキト足ヲ翹テ手ヲ握リ危ニケルモオホカリケリ  
 カノ時輔ハ相摸守時頼ノ長男ニテ鎌倉相州時宗ノ  
 兄ナリシガ関東ノ執權ハ我コソト思ハレシニ舎弟時宗  
 ニ家督ヲトラシ年來鬱憤ヲアタクニ逆心ヲ企テ内々ソ  
 ノ用意アルヨシ誰トハヒラス時宗ニ告申ケル故ニマツ

北條九代言

ノ卷一

十五



義宗ヲ上洛せし事人アリサマヲ伺ハセ反逆ノ事忽  
 チニアラハレテ時輔スデニ討レタリ。鎌倉ニモ北條朝時  
 ノ孫左近大夫公時同ク朝時ノ六男中務太輔教時ヲ  
 時輔ニ一味同心シテ時宗ヲ討ント計リケル。コト今  
 ハカクシナクアラハレシカハ公時教時一所ニヨリ合テ京都  
 ノ事ハイカバ心モナシトソノ左右ヲ待ケルアヒタニ時  
 宗ノ討手透間ナク込カケテ一八モ泄サズ討取タリ。近  
 隣大ニサハギシカトモ事スミヤカニ落居シケレハ頓テ音  
 ナク静マリケリ。天運ノ命ズルニヨラスシテ非道ノ巧ミヲ  
 企ツルモノハ天カナラス。爵ヲホトコシ鬼ステニ罪ヲウツ  
 ガ故ニ六ヒストイフコトナシ運ヲ計リ命ヲマツトハ君  
 子ノ智徳ライフナルベシ中御門左中將実隆此謀反ニ

クニセラレタリト聞エシカハ出仕ヲ留メラレシハ少ク籠  
 居シテオハシケリ。關東ヨリイカニ申付ラレシモ知難シ  
 トテソノ方様ノ人ハ易キ心モナカリシカトモ。武家ノ  
 人ノ何ホトノ事カアルベキトテ宥免ノ沙汰ニオヨビ  
 シカバヤガテ殿上ノ出仕ヲゾイタサレケル。  
 一院崩御 付 天子ニ流井攝家分門  
 同二月十七日。一院後嵯峨法皇崩御アリ。寶筭五十二  
 歳初メ御位ヲ後深草院ニユツリタマヒテ。後モ十院  
 中ニシテ政事ヲ聞シタマフコト二十餘年世間物  
 ツカニテ。天下四海才ヤカナリケレハ宸襟御物  
 コトモオハシメサス。御遊歌ノ會諸方ノ御幸二月日ヲオ  
 クラセ給フ。御果報イミジキ天子ニテ。ワタラセ給フ。コノ

分ニテハイツニテ存ラセ給フトモ。イヨクメテタキ  
御事ナルベシトイヘトモ。人間愛別ノ歎キ四大離散ノ  
悲モ三ハ誰トテモ遁ルニジキナラヒナレバ。夕子マチニ无  
常ノ風アラク吹テ。有待ノ花萎ニ落サセタマヒ。鼎湖ノ  
雲オサマリテ。蒼梧ノ霞ニ隔リ給フコソ。オナシケレ。御  
遺勅アリケルハ。コレヨリ後ノ皇位ハ新院後深草院ト當  
今龜山院ト御兄弟ノ一流代々即位アルベシト仰セオ  
カレシト。世ニハ申傳レドモ。實ニハ北條時宗朝廷ヲ分テ  
二流トシ。ソノ勢ヒヲウスクレ奉ランガタマヒ。ニカノ一流代々  
御治世アルベシト計ラヒ申ケルトゾ聞エシコレヨリ以前  
後鳥羽院承久ノ乱ノ時。西園寺公經卿心サレテ。鎌倉ニ  
通ル。左京大夫北條義時ニ心ヲ合セテ。京都ノ手術ヲ

計ラレシカハ。天下静マリテ後ニ義時ソノ心サレテ感レ  
テ。西園寺ヲ推挙シ禁中ノ事ヲ執マカナハセマシラセシ  
カハ公經卿ヨリ子孫。又テニ榮ヘ官位高ク昇進シ。大相  
國ニ經アカリ。太政大臣實氏公ノ御娘後嵯峨院ノ中  
宮トナリ。コノ御腹ニ後深草龜山御兄弟ヲ生マシラセ  
ラル。コレラモ大関東ノ計ラヒニヨツテ。コノ西園寺ヲ執  
セラル。所ナリ。又ソノカニ六掃政関白ニナリタマフ。近衛  
殿九條殿タ。二流ナリケルヲ。四條院仁治三年ニ良実公  
関白ニナリタマフ。コレニ一條殿ノ御先祖ナリ。後嵯峨院  
寛元四年ニ実經公関白トナリタマフ。コレ一條殿ノ御先  
祖ナリ。後深草院建長四年ニ兼平公掃政トナリタマフ。  
コレ鷹司殿ノ先祖ナリ。今ニ傳ヘテ五掃家トハ申習ハ

レケルコレモ鎌倉最明寺時頼入道ノ執權セシヨリ。攝  
政関白ノ御家ヲアタニ分テ。權威ヲ隣ケ、イラセケ  
ルトナリ。今又相摸守時宗執權ノ世ニアツテ。天  
子ノ御位ヲモ二流ニ分チ奉リ。カハル、寶位ヲツカセ  
奉ルコト。ヒトニ皇孫兩岐ニレテ。王威ヲホシ、井ノ、ニサセ  
タテツル、レキ方便ナリ。又、西園寺ノ家ノ、三ノ、ニ當時  
ハ天子ノ御外戚トナリ。清華ノ家ニ、肩ヲ並ズル人ナク。  
權威タカク。カ、ヤキテ。朱門金殿、薨ヲ磨キ。榮昌大ニ  
ス、ニテ。紆宇玉砌軒ヲアハセタリ。イカナル王公大名ト  
イヘトモ。礼ヲ厚ク敬フツク。ソノ心ヲ取テ崇仰セララル  
出入トモガラズ、テモ餘ノ人ハ眉目トレテ。ウラヤ、ニレク  
ゾオモヒケル。

北條政村卒去 付 山階左大臣薨去

同十年五月七日。北條左京大夫政村卒去セラル。是遠  
江守義時ノ四男ナリ。年六十九。同六月ニ北條重時ノ  
四男。武藏守義政ヲ執權トシテ。加判セシム。相摸守時  
宗コレヲ奉レテ。政村ノ裔リニ居ル門族ノ中。一家ハ  
別離ノ涙ニ沈ニテ。後會ノ時ナキコトヲ歎キ。一家ハ  
勢名ノ花ヒマキテ。前世ノ芳アルコトヲ喜ブ。一枯一  
榮世間ニナカクノコト。同八月京都ニハ山階前左  
大臣実雄公。今年五十七歳ニレテ薨セラレ。西園寺ノ  
一家ニレテ。當今新院ノ舅トナリ。後宇多伏見兩帝ノ  
外祖ナレハ。威勢ヲ當代ニ示ヒテ。榮華ノ身ニアリ。  
官位奉祿何ニ付テモ不足ナルコトナレトイヘトモ定レ

ル死業ハ道ルニ地ナク限レル命根ハ保ツニタヨリヲウ  
コナヒ佛神ノ冥カコニ空ニク者扁力醫術イタツラニ  
手ヲ拱又キ少水ノ魚ツ井ニ涸ニツキ屠所ノ羊果ニテ  
行窮マリ一朝ノ草露オチテニタヒ帰ラスニ泉ノ叢塚  
ウツモレテ又ヒエカス親疎遠近アハレフモ多ク悲三ノ  
色ヲ含ミケリ今年ノ秋ノ比蒙古ノ使者趙良弼來朝  
ニテ筑紫ノ博多ニ著ニケルコノヨシ六波羅へ告來ル鑣  
倉へ早馬ヲ立テ伺ハセラレレカハスナハチ禁中へ奏セラ  
ル年來日本ヨリツ井ニ牒書ノ返狀ヲモツカハサレス  
然ルヲ每度使者ヲ奉ルコレ朝貢ノ式礼ニモアラス和  
親ノ信トイフニモアラスタ本朝ノ風儀ヲウカヒヒ弊  
ニリテ伐取トノタメナルヘレ重子テ來ラバ一人モ本國

高野

情

徒

ニハ返スミジニナコトクク頭ヲ劔ヘレコノタヒハソノ案  
内ノタメ帰ラシムルトコロナリ京鑣倉へマイルニハ及ハス  
トテ太宰府ヨリ舟ヲ出サセ趙良弼ヲ追返サレタリ  
蒙古ノ王大ニ怒テ日本ヲ伐亡ホサズハアルベカラス  
トテ軍兵ヲ用意シ兵船ヲツタルコノコト下々日本ニ聞  
エケレバ鑣倉ニモ内々武備ノ設ケヲカマヘテ諸國ノ軍  
勢ヲ點檢セラレケリ

龜山院御讓位付蒙古賊船退去并東宮立

同十一年正月主上御年二十六歳ニテ御位ヲ太子ニ  
譲リタマフ院号蒙ラセタマヒ龜山院ト稱シ奉ル三月  
二十六日太子實位ニツキタマフ御年初テ八歳ニナラセ  
タマフ御母ハ藤原左大臣実雄公ノ御娘ナリ後ニ後京

北條九代目

卷十

十九

極女院ト号ニ奉ル九條関白忠家公攝政トシテ朝政  
ヲオモハルコノ時後深草ヲ本院ト申シ龜山ヲ新院ト  
申ケル同キ月ニ筑紫ノ探代早馬ヲ六波羅ニ立テ  
申ケル蒙古ノ賊船大將二人大船三百艘早船三百艘  
小船三百艘ソノ人数二万五千ステニ日本征伐ノタメニ  
纜ヲ解テオシワタルト聞工候御用心アルベシト告タ  
リケルコレ年來數度使者牒狀ヲオクルトイヘドモ日本  
ニ返狀ナキニヨツテナリ禁中ニ主上仙院ヨリ諸社  
ニ勅使ヲ立テ御祈念アリ諸寺ノ高僧ニオホセテ秘法  
ヲオモハル関東ヨリ筑紫へ下知シテ武備ニオコタリナ  
シ同十月ニ蒙古ノ賊船對馬ニ丑世來ル筑紫ノ武士等  
ヲ守リテ防キ戰カフ蒙古ノ軍法乱レ靡キテ調ラ

ス矢種盡ケレハ海邊所々ノ民屋ヲ盤妨シコレヲモ  
テコノタヒノ利トシテ軍ヲ引テ漕歸ル日本ノ武士  
等モ攻メ破ラレサルヲ勝ニシテ軍ハコレニ止ニケリ  
同月本院後深草第二ノ皇子熈仁ヲ東宮ニ立ラル  
主上ニ六御年モ二歳ニテマサリタマフ子ニ新院龜山  
御在位ノ御時東宮ニハマツコノ宮ヲコソ立ラルヘカリ  
シラ後嵯峨法皇ノ慮ヒトニ新院ノ御許ニオホヒス  
ヨシラ大宮ノ女院ヨリ関東へ仰セツカサレシカハ時  
宗計多ヒ奉リテ主上ヲ御位ニ定メケリコレニ依テ新  
院ハ御讓位ノ後モ政務ヲ知シメテ御心々ニフルマ  
ヒタマフ本院ハ何事ニ付テモ少モ綺ヒ給フベキ御心モ  
マシマサス夕疾御飾リヲモオロシ世ヲ浮草ノ風ニマ

カセテ御身ヲハニ行脚アヒギヤシ諸國ノ灵地レイチヲモ巡礼ビシイトソウ并ナ菽シヤクセハヤトオホシメシケルトコトニ北條時宗計ハカフラヒ申シテヒ無ヒ仁親王ニシノミタヲ東宮トシニ立テ下シイラセシカハ本院ハカフノカク喜悅キエツノ眉ヒヲヒラキ御落飾ラクシヨクニモオヨハス新院ノ御心カキヤキシヨソナクメヲケテ本院ト御中ハヨクナリ冬ニ大宮ノ女院ニモ嘉慶欣悅カキヤキシヨソナクメ斜ナクメナラス太平長久ノ寶運ハ本ウツシナリト世ノ中ニヒクカナクハ三々ハ隔ハ十クハツミエニケルコレヨリ後ハ讓位シヤウヤソクナリ即位立坊ノ御事ハニ関東ヨリゾ計ハラヒ申サレケリ

改元カイゲン付ツキ蒙古使被追返コウコウシヒヨクカハル并ナ一遍上人ヒツン時宗トシムネ開基カイキ夫天運循環ツクニクシテ四時迭シタガヒニ代謝タイダス年モヤウヤク暮行キヨウコウテ立カハル春ニモナリシカハ青陽ノ空アヲノケレキ山カスミニ霞ノ衣キヲ著キテ谷ノ戸トイヅルウクヒスノ氷コホレル涙ナミダモ解トク初ハツタリ改

元有ハテ建治元年ト号ス二月上旬ニモナリシカハ餘寒ヨカニハキイダ盡ツキサレドモ木ノ葉ハヤウクハ萌キニツハ花待ハナマツカヌル好事カソホノ人ハイトハ永ナガキ日ハヲカクハテ花信ハナノチノ風ハヲツハ招マツキケルカハル所ニ蒙古ノ使トシ杜世忠等トシイチヂウラマタ日本ニ來朝ライテウス高麗人カウライモオオビク來キレリ太宰府タサヰニ舟フネヲトメ船中フネノナカニアル物モノドモコトトク注録チュロクニアタノ人等タノヒトヲハ太宰府ニ押留オシトウメ杜世忠等トシイチヂウラタニ三人サニヒトヲ鑪ロ倉クラヘツツカハシケル洛中ラクチュウハ人ヒトラレススグニ関東セキトウニサシ下ス路次ロジノアヒヒダ嚴キニク守護シユゴニシテヒトハ三囚人サンシユジンノコトクチリ夜ヨヲ日ヒニツキテ鑪倉ロクラニツクトイヘトモ蒙古ノ牒狀トウカウニ返簡ヘンカンスベキニオヨハストテソク追返オウカニハ六元ロクゲンニ歸キラシム同十二月北條左近大夫時國上洛トシキニシテ六波羅ロクハノ南方ミナミトナリ西國セイコクノ成敗セイバ

ヲトリオエナフ。コレハ從四位下相模守時房カ曾孫ナリ。  
智仁ノ德篤クシテ。寛温ノ惠ヲホトコシケルハ。人望ノ  
サストコロ。鎌倉執權ノ加判タリトモ。誰カ其命ヲ輕ク  
スヘキ。然レドモ時世ノ習ヒ京都ニ上セラルハ。世メテノ  
事トゾ申合ケル。今年鎌倉藤澤時宗念佛ノ流義草創  
ノ開山一邇上人ハ。伊豫國ノ住人河野七郎通廣カ次  
男ナリ。家ト三サカヘテ國郡恐レシタカヒ武門ノ雄壯  
タリケレバ。四國九州ノアヒタ陀ニ耻ルオモヒナレ。二人ノ  
妾アリ。イツレモ容顏ウルビレク。心サ、優ナリシカバ寵  
愛深ク侍ベリキ。アル時二人ノ女房基盤ヲ枕トシテ。  
頭サシ合セテ寐タリケレバ。女房ノ髻タチセチニ小キ  
蛇トナリ。鱗ヲ立テ。喰合ケルヲ見テ。刀ヲ拔テ中ヨリ

577  
断分コレヨリ執心愛念嫉妬ノオソロシキコトヲオモヒシリ。  
輪廻妄業因果ノ理ヲワキマヘ發心シテ家ヲ出ツ。比  
睿山ニ上リ受戒桑門ノ形トナリ。西山ノ善惠坊上人  
ニ逢テ。本願念佛ノ法門ヲ學シ。十一年ヲ經テ。三ツカラ  
知真房ト名ヲ付テ。ソレヨリ熊野ニ奉詣シ。山復山青巖  
ニ雲ヲフニ。水復水碧潭ニ波ヲレノギ。道行人ニ逢テモ男  
女貴賤ヲモラハズ。タゞ念佛ヲス。メテ。三ツカラモ亦行々餘  
言ヲ交フルコトナク。念佛ヨリ外ノ声モナレ。角テ本宮證  
誠殿ニ奉向ニ。衆生利益ノ結縁ヲア。子ク十方ニ弘通  
セシコトヲ祈誓シテ。御寶前ニ通夜セラレケル所ニ御寶  
殿ノ内ヨリ。齡ヒ闌タル老僧ノ。アラハレ出サセタ。ヒテ。妙  
ナル御声ヲ奉テ仰セケルハ。ソレ弥陀如來十劫正覺ノ

アカツキ一切衆生ノ往生ハ六字ノ名号ヲモテ決定  
 業トサダメタセフ一タビモ耳ニキハ口ニ唱フルトキハ永ク  
 佛種トナリテ成佛ノ縁ヲムスブ今ワガ示ス所ヲ聞テ  
 札ニ作りテ一切ノ貴賤男女ニ賦リ與ヘテコノ念佛ノ  
 結縁ヲオモタルコトナカレトテ七言四句ノ偈ヲ御口ツ  
 カラサツテ給フソノ文ニ六字名号一遍法十界依正一  
 遍躰万行離念一遍證人中上上妙好花ト唱ヘサセタ  
 フト見テ夢想ハスナハチ覺ニケリ知真房上人此夢想  
 ヲ感ジテ正身ノ權現ヲオカニ奉リ歡喜ノ淚措所ナ  
 シスナハチコノ偈ヲ札ニ書テ老少男女ヲイハス賦リア  
 タテ結縁ス四句ノ偈ノ上ノ字ニ六十万人人トアル上ハ  
 決定往生ノ念佛ヲアキタスメント思ヒ立テ九州二嶋

ノ末ニテモ千里ヲ遠ニトセズ万仞ノ波ヲコエテ又鎮西  
 ヨリ洛陽ヲ心ザシ道ニシテ一人ノ僧ニ行達アリモトヨ  
 リ道心ヲカク世ヲ適レシ聖ナルガ知真房上人ノ念佛  
 ノ弟子トナリ佗阿弥陀佛ト号シテ隨逐ニシテ諸國ヲ  
 メグル魚ト水トノアトクニテ影ト形ニ似タリケレバ師  
 弟ノ情ヲカクニテ立離ル時ゾナキソレヨリ少キ回リ  
 信濃國佐久郡伴野トイフ所ニテ歳末ノ別時行サヒ  
 テ踊躍歡喜ノアリニ立テ唱ヘ居テ十ハ踊躍ノスガ  
 タ身ヲワスレ息鐘ノヒキ空ニワタリ紫雲軒ニ覆ヒ  
 タリ結縁ノ男女モ口トモニ歡喜ノ淚ヲ流レケリ昔空  
 也上人市朝洛外ニシテ踊躍ノアリニ踊念佛ニタヒ  
 テリコレゾ其事ノ初メナル奥州ニオモキ白川ノ関ニ掛

三三



リテ修行ステニ日ヲオタリ山野ハ同ジク續テトモ地  
 形ハ又ヒトシカラス月ハ野草ノ露ヨリ出テ遠樹ノ梢ニ  
 ノホリ日ハ海岸ノ霧ニカタフキテ幾松ノ緑ニウツロフ  
 ソノカミ西行上人修行ノ時関屋ヲ月ノモル影ハト詠ビ  
 ケンコトヲ思ヒ出テ関屋ノ柱ニ書付ケル  
 白川ノ関路ニモナク留ラズ心ノ奥ノハテニナケレバ  
 又アト時ヨメル歌ニ  
 思フコトナクテ過ニレ昔サ人忍バ今ノナキトソナ  
 跡モナキ雲ニアツソフ心コソ中ノ月ノ障リトハナシ

カクテ東西南北海北陸ノ諸國京都洛外ニイタルトテ影  
 フ殘ニ教ヘラトベメアノ子ク念佛ヲ弘通シテ相州藤澤ノ  
 道場ヲカマヘ鎌倉ヲメグリテ念佛ヲ結縁シコトニモナク

留マラス修行ノ心サレオコタラス攝州兵庫ノ觀音堂ニ  
 正念ニシテ遷化アリ正應二年八月二十三日生  
 年五十一トゾ聞エシ陀阿弥陀佛ノ遺教ヲモリテオ  
 ナビク諸國ヲ修行セシヨリ一遍上人時宗ノ流義今  
 ノ世ニテモ退轉ナシ

主上東宮御元服

建治二年正月ニ將軍惟康讃岐權守ニ補セラレ給フ  
 同四月ニ蒙古ノ使者長門國室津ノ浦ニ來リケルヲ  
 同八月ニ関東ニ差下サル鎌倉ノ評定ニハ數年度々ノ  
 使者ヲモツテ日本ノ地形風景ヲ見テ軍法ノ手段ヲ  
 コシラフルト覺エタリ今ヨリ後ハタニ朝貢ノ使者ト  
 イフトモ活テ返スヘカラストテカノ使者二人ヲ龍口ニ

引出ニ首ヲ劊テゾカケラレケル同三年正月ニ主上御  
元服ニヒス。御年十一歳。攝政太政大臣藤原兼平公  
加冠タリ。理髮ハ頭中將具頭トゾ聞エシ。同月十九日。  
龜山ノ上皇へ朝覲ノ行幸アリ。ウチツヅキ石清水賀  
茂ノ行幸アリケレバ。京都ノアリサ。イト賑々シクゾ覺  
エケル。同五月。北條武藏守義政執權ノ加判ヲ辭退シ。  
剃髮入道ニテ。信州塩田郷ニ閑居セラル。相州時宗一判  
ニテ。大小事ヲ下知セラレ。晝夜政理ニ思ヒラス。井ヤシ心  
ノ隙ハナカリケリ。同十二月。東宮熙仁御元服アリ。春宮  
傳二條左大臣藤原師忠公加冠タリ。春宮大夫源具守  
理髮セララル。主上東宮御元服ニシテ。洛中ノ上下世ハ  
太平ノ運ニカサヒ。時ハ淳厚ノ徳ヲ兼タリ。諸國オトシ

ク五穀コタカニ東耕ノ勞空シカラス。西牧ノ畜ハ二盈千  
タリ。聖代明時ノ寶祚仁慈。理政ノイタストコ西ナリト。  
万民百姓タノシニ。サカエ月花ヲ賞ジ。歌曲ニ與ジテ  
悦フコト。カキリナシ。

殺蒙古使 付 蒙古企伐日本

同四年ニ改元有テ。弘安元年トゾ号レケル。正月上旬  
ニ北條右京大夫時村上洛シテ。六波羅ノ北方トナリ。  
京都西國ノ沙汰ヲ。ナリオコナフ。同二年正月ニ將軍惟  
康ヲ正二位ニ叙セラシ。位記ステニ鎌倉ニ下著ス。同三  
年二月ニ太元ヨリ使者トシテ杜世忠ヲツカハシ。太宰  
府ニ著岸セシカバ。ヤカテ捕ヘテ鎌倉ニ告タリケレバ。関  
東ニ召下シ。瀧口ニシテ首ヲ劊。由井ノ濱ニ梟ラレケリ。

北條九代記

蒙古ノ王傳ヘ聞テ大ニ怒リ。大將軍等ヲ催シ兵船ヲ  
 造リテ大軍ヲツカハシ日本ヲ伐亡ホサントテ。武勇ノ兵  
 ヲ子マビケルヨシ又本朝ニ聞エシカバ。年比ニハ替リテ頗  
 大事ノ時節ナリトテ。公家ヨリハ伊勢ヘ勅使ヲタテラレ  
 奉幣御祈禱精誠ヲツクサシ。諸寺諸社ニ仰セテ。御祈  
 念護摩ノ行オヒハ。日ヲ重子テ。オコタリナシ。北條相模  
 守時宗ハ鎌倉ニアリナガラ。筑紫ノ軍士ニ催促シテ。防  
 戰ノ武備ヲイタサシメ兵糧秣ニイタルミテ。事闕サル用  
 意アリ。蒙古ノ軍モ強クシテ。西國カタブコトアラハ  
 東國ノ軍兵ヲ上セテ。主上東宮ヲ守護シ奉リ。本院新  
 院ヲ八閔東ヘ御幸ナシ奉ルベシ。又筑紫ノ左右ニヨツテ  
 兩六波羅ノ兵トモ鎮西ヘ下向シ命ヲ量リニ防戰シ。

勲功アラントモカラニハ忠賞ヲ行サズベシ。天下ノ大事  
 コノ時ナリト下知セラル。諸國ノ武士トモコレヲキメテ。  
 多クハイカナルコトアリトモ。コノ日本ヲ異賊ニハ奪ハル  
 べシ忠戰ノ功ヲアスハシ重賞ニアツカラシ。コレ世ノ常ノ  
 及逆ニハ替リテ。面々身ノ上ノ大事ゾカシト。諸軍一  
 同ニ齒金ヲ鳴シ牙ヲカミテ。思ハヌ人ハナカリケリ。

鎌倉北條九代記卷第十終

あ  
あ

○ 世傳大正清

之卷

三

